

入賞作品集

NPO法人 地球こどもクラブ
第21回小学生・中学生作文コンクール



2011 WINNERS

Non Profit Organization The Children of The Earth's Club
The 21th Essay Contest for Elementary and Junior High School Student

入賞者一覧

環境大臣賞

小学生部門　『私の好きなフリーマーケット』

守田 朱音　神奈川県開成町立開成南小学校六年生

中学生部門　『命をつなぐ環境』

池田 茉奈美　福岡県大野城市立大利中学校二年生

内閣総理大臣賞

『お古たちをリユースへ』

稻垣 真於　秋田県横手市立増田中学校一年生

外務大臣賞

小学生部門　『僕の家の畑』

渡辺 優太郎　茨城県つくば市立田水山小学校六年生

中学生部門　『小さな努力で…』

鈴木 晴菜　北海道教育大学附属釧路中学校一年生

審査委員長賞

『私の3R』

新城 琉妃　沖縄県普天間第二小学校四年生

文部科学大臣賞

小学生部門

『ぼくの3R』

稻垣 風一郎　秋田県横手市立増田小学校四年生

中学生部門

『地球の中でもぐる命は、大自然のリサイクル』

正田 真悟

茨城県土浦市立土浦第三中学校三年生

内閣総理大臣賞

秋田県 横手市立増田中学校一年生

『お古たちをリユースへ』

稻垣 真於

無理だわ、リデュース（ゴミを減らす）なんて。リユース（再使用）だって、消毒したり乾かしたり。リサイクル（再資源化）するにも工場が流されてしまった。巨大津波：

三月十一日、机の下に隠れた私たちは、教室の中を勝手に動く机を逆に押さえながら叫んでいた。東日本大震災。その日から続いている避難生活。避難所を転々としながら考えたのは生き延びること。3Rなんて、この作文を書くまで考える余裕は全くなかつた。

そう、人間はエゴだ。時間もお金も物もたっぷりあって、何の心配もしなくていい時に、3Rだの省エネだの騒いでいる。エコな生活でもエゴ丸出しの生活でも、どっちでも選べる。

私だってエゴ人間だったかもしれない。テレビでニュージーランド地震やアフリカの難民のニュースを見ても、地雷をふんで足を失った子どもの写真を見ても、かわいそそう、ちょっとは思つたけど、何もしようとなかった。

原発が爆発して、十キロ、二十キロ、三十キロ先に逃げることになり、最後にいとこの家に来た。

そして秋田の中学校に転校することになった。私が進学するはずだった浪江東中学校の制服はセーラー服で、マーチング部に入る予定だった。

楽しみが全部消えた。

着がえも何も持ち出せずに逃げた私は、入学式に何を着ればいいんだろう。不安だった。春休みのある日、次々に届けられたお古の制服やジャージ、カバン。中学校にあいさつに行つたら、名札まできていた。糸がほつれていたり、縫の具がついていたり、制服がテカつてたり…。そんな見栄えの悪いお古たちだつたけど、中学校で必要な物を何つもつていなかつた私にとつては、どもどもありがたかつた。

全身リユースで固めた私と、同い年のいとこも一緒にお古の制服を着てくれた。旅館をしているいとこの家は、他にも被災者家族を受け入れていて、その子の分の制服も集めてくれていた。みんなんなおそろいのリユース。

もしかして私は卒業式もこの中学校かもしれない。福島へ帰れる日がいつになるのかわからないけど、私は決めた。3Rをただの趣味にしないで、権利として実行する。

一日も早く復興を成功させるため。

外務大臣賞

小学生部門

茨城県 つくば市立田水山小学校六年生

『僕の家の畑』

渡辺 優太郎

僕の家の庭には小さな畑があります。毎年新学期が始まるころになると、父が畑をたがやしはじめます。クワを使ってウネを作ります。僕も手伝いますが、かなりの重労働です。父の話では、この作業が秋口の収穫に影響し、特に土の栄養が決め手になるそうです。

良い土にするために普段からしている事があります。まず、畑に穴を掘つて台所から出た生ごみや庭の雑草をその穴に埋めます。何週間かたつと栄養の高い土になります。さらに、飼い犬のエサは家族の食事の余りで、そのフンを集めて畑にまいています。このようにして畑に栄養を与えていきます。

畑を耕したあとは種まきです。ジャガイモやトウモロコシ、ゴーヤなどを植えます。暖かくなると、雑草がすごい勢いで生えてきます。雑草とりは週に一度はやらないと間に合いません。除草剤を使うこともできますが、それではおいしい野菜はできない、と父はいいます。雑草は貴重な肥料になります。

秋口はいよいよ収穫です。野菜は無農薬で、肥料も家のものだけですので、その大きさは売っているものよりも小さいですが、どれも味がつまっている感じがするし、苦労して作ったものを食べるの

は格別です。

僕の家の畑はリサイクルになっています。種は買ってきますが、肥

料は買つてくるものはありません。手間を惜しまなければ、太陽の光と雨水だけで十分育ちます。おいしく食べた残りは畑に帰っています。

父は、江戸時代の日本は今よりずっとリサイクルが上手だったと教えてくれました。同じ時代のヨーロッパの大都市は、ある共通の問題がありました。それは人々の排泄物処理についてです。道には人糞が捨てられ、街中が臭かつたそうです。一方、江戸はまるで違っていました。街をかこんで田畠がありました。人糞は貴重な肥料となるので、捨てられることがなく田畠にまかれました。これで江戸の清潔は保たれました。畠と都市にリサイクルがあつたのです。

今の時代に同じ方法をとることはできませんが、学ぶべきは、モツタイナイ、の精神です。この日本語は今や世界に通じるものになつた、と父が言います。数年前にケニアという国の副大臣が世界中の人が集まる会議で、この言葉をみんなに広めました。副大臣は、モツタイナイは、消費を抑える(リデュース)、再び使う(リユーズ)、生まれ代わらせる(リサイクル)の三つのRを表している、と説明しました。同じ意味の言葉は他にはないのだそうです。日本人が当たり前に行つていたことが世界の環境問題を解くヒントになるかも、と思うとうれしくなります。

僕は家の畑の作業を手伝うことで、大切なことを学ました。これからも、モツタイナイ、をどんどん言って行動していきたいと思います。

『小さな努力で…』

鈴木 晴菜

私は年離れた兄が一人いる。その差7歳。そのせいで、私は小さいころから兄のおさがりを着ることが少なくなかった。

黒い、白クマ柄のTシャツも、青いライン入りの短パンも、果ては帽子まで。でも私は嫌がるどころか大喜びで、いつも喜々として小学校へ通っていた。

そんなある五年生の春。急に、女子に話しかけられた。

「その短パン、男っぽくて格好いいね。もしかして男物？」

「うん。兄ちゃんのなんだ」

私が笑いながら、おさがりの短パンを指差すと、その女子は驚き顔で大声を上げた。

「そうなの？ 私なんか姉ちゃんの服でさえ着ないのに。偉い、エコだね！」

：偉い？ 何故？ この私が？

私は不思議な気分になつた。確かにエコなのかもしれないが、今まで意識した事はなかつた。とても不思議だった。

それから数日後。家庭科の授業で、『3R』の事を習つて、やつと私は気付いた。

「そつか！ 私つてずっと『3R』やってたのか！」と。

教科書をよく読むと、私の『おさがり現象』はどうやら『リユース』に分類されるようだ。なんだか嬉しいような、むずがゆい気分

だ。

よく考えてみると、私の家では『3R』が普通に行われていた事に気付いた。

まず、おさがり。私は兄の服でも母のかばんでも喜んで使つている。本や辞典も、祖父から母に、母から兄に、そして兄から私にと、ボロボロになつても読み続け、引き継いでいる。これは『リユース』に違いない。

次に、母はよく、着られなくなつた服や穴が開いたタオルを使い雑巾を作つている。私も、短くなつた鉛筆同士をくつつけ、長い鉛筆を作つたりする。おそらくこれは『リデュース』。

最後に『リサイクル』だが、これはもう、すごい事になつていて。母は私が小学校を卒業するまで、ずっと地域の空き缶集めボランティアとして活動してきた。その空き缶を売り、学校に本も寄付した。他にもその小学校では、使用済み油を集めてガソリンをつくるBDF回収も、古紙回収も積極的に行つていた。もちろん、我が家ではホチキスの針までしっかりと分別し、ゴミを捨てている。

私は何を言いたいか？ つまりは、『3R』、そして地球を守る事は、簡単に出来るのだ。我が鈴木家のようないふれた苗字の家でも、佐藤さん一家でも田中さん一家でも。

特別な事はいらないのだ。自分たちの出来る事を確実に。そして、青く美しい地球を守れるのなら、こんなに嬉しい事はないはずだ。

私も、おさがり現象を、リユースを続けよう。流石に兄のは卒業

文部科学大臣賞

小学生部門 秋田県 横手市立増田小学校四年生

『ぼくの3R』

稻垣 鳩一郎

おとうさんへ。

ぼくはこっちに来てから四本も歯がぬけました。メールしようとしたけど、颶一郎の、「颶」がへんかんできなかつたのでやめました。

歯がないのに、今日の「はんは、イカと大根のにものでした。かめないイカをリサイクルして、やわらかいイカにできたらいいのに」と思いました。

「颶一郎。そういうのはリサイクルって言わない。」

と、いどこに言されました。おばちゃんが、

「3Rってなに?」

と聞いたら、おばちゃんは、

「そうだ。3Rをインターネットで調べたついでに、作文かけばいい。宿題の自学も終わって二石二鳥。」

と言い出しました。

それで調べたんだけど、3Rどころか、5Rや、7R、一番多い所で15Rまであって、本当の3Rは何なのかわからなくなってしましました。

「いっぱいあるRの中でも颶一郎がベスト3を決めればそれが3Rだよ。」

と言われました。

ぼくの3Rは、

3位||リユース。福島から秋田にひなんして來たぼくに、ランドセルや学校のジャージ。さらには自転車までゆずつてくれた友だち。ひなんじょにひなんした友だちは新品のをもらえたと思うけど、ぼくはリユースできてじまんできます。

2位||リサイクル。牛にゅうパックをトイレットペーパーにするだけではなく、かめないイカを、かめるとてもおいしい食べ物にリサイクルできるような発明をしたい。

一位は:リターン。早く福島に帰りたい。ぐちゃぐちゃの浜辺や家を元にもどして空気のほうしやせんをとつて、ふ通の生活にもどりたい。

おとうさんは、さい玉の学校、お母さんは、福島の学校、ぼくとおねえちゃんは秋田の学校でがんばるから。おとうさんのベスト3R。こんど会えたら教えてね。

文部科学大臣賞

中学生部門 茨城県 土浦市立土浦第三中学校三年生

『地球の中でもぐる命は、大自然のリサイクル』 正田 真悟

三月十一日午後二時四十六分、ぼくたちの町を震度六強の激震が襲った。死ぬかと思った。電気も水道も使えなくなり、道路の信号さえもすべて止まつた中、ようやく家にたどり着いて、テレビから流れてきたのは、東北の津波の信じられない惨状だった。

そして、次の日、福島第一原発が水素爆発を起こしたのだ…。福島の隣の茨城にももう放射性物質が届いているそうだ。

三十年間手さぐりで無農薬農業で生計をたててきたぼくのじいちゃんの畑にも、放射性物質は降り注いだ。

じいちゃんの畑の土は、特別な土だ。大量の街路樹の落ち葉や、養豚場の豚ふんや鳥糞、EM菌の力をもらって、周りの土地より十五センチも盛り上がつた、黒々とした有機物たっぷりの土なんだー。そんな大切な土が、放射能で汚染されてしまった。ぼくは本当に悲しかつた。じいちゃんの畑の野菜は売れるのだろうか…。

地球の中で生物は循環している。季節は巡り、春は毎年やってくる。子供は親になつて、また子供を育てていく。

これは大自然のリサイクルだ。その大自然のつながりが今、切れてしまいそうになつていい。母なんて気が狂つてしまいそうだ。ここに住んでいいのかとまで心配している。

近所の人も不安そうで暗い。

ある日、ぼくと母は庭に咲いたたくさんのチューリップを摘み

取つて花束にして、近所に配つた。家のチューリップはなくなつてしまつたけど、近所には笑顔があふれた。

地球を守ること、それは大自然と自分の周りのつながりを大切にしていくこと。地域の人々と協力して地域を守り、自分もまた地域から力をもらおう。

ぼくはここで生きていく！

今までだつて地球は放射能だけでなく、化学物質や大量のゴミなどに汚染され続けてきた。

ぼくたちは、その地球をきれいにしよう！

チューリップの後の庭には、ひまわりの種をまいた。ひまわりにはセシウムを吸着させる効果があると調べたからだ（ファイトリメディエーション）。ひまわりを植えることで、福島と茨城を応援するんだ。学校にも種を持っていくぞ！

だいじょうぶ。地球は、日本は大丈夫。福島も茨城も大丈夫！

ぼくたちが守つていく。取り戻す！！

『私の好きなフリーマーケット』

守田 朱音

私の通っているダンス教室では、時々フリーマーケットを開きます。このフリーマーケットでは、ふつうとはちがう工夫がされています。私が楽しみにしているこのフリーマーケットの良い点を三つ紹介したいと思います。

一つ目は、自分が使わなくなつた物をリユースやリメイク出来ることです。例えば、自分が着られなくなつた服を出品すると、他の人が着てくれます。そうすれば、その服はゴミにならず、必要としてくれている人が大切にリユースしてくれます。また、自分が使わなくなつた物を違う物にして出すことも出来ます。例えば一部に汚れが付いてしまつた服でも、きれいな部分を使って、エコバッグやかみゴムなどにリメイクをし、欲しいと思う人に使ってもらえます。私自身もお気に入りだったシャツをきんちゃくぶくろにリメイクしたり、犬の洋服に作り替えて使っています。捨ててしまえば、ただのゴミですが見直すことで大切な資源になる物がたくさんあります。こうすることで自分が使う時もその物を大切にしようと思えるので長く使えます。さらに物を作り替える時に、「どんな物に作り替えれば使えるかな。」と考えながらリメイクするのがとても楽しいです。

二つ目はある工夫をすることと、自分の思いが相手に伝えられ、次の人大切に長く使つてもらえることです。このフリーマーケット

トでは、「思い出カード」を付けないと出品出来ません。このカードがあるおかげで、その持ち主だった人の思いが伝えられるので次に使う人も大切にしようと思います。

そして、三つ目が他のフリーマーケットと一番違う点です。それは、お金を使わないところです。このフリーマーケットでは自分が使わなくなつた物をチケットにかえて、それで他の人が使わなくなつた物と交かんします。お金を使わないので子どもでも参加てきて、たくさん的人が利用できます。また私は、子どもだけで見て選び、好きなようにお買い物出来るのが一番楽しいと思います。

今も私は、そこで交かんした服を大切に着ています。ダンスのレッスンではお姉さんが使っていたレオタードを着ています。逆にお姉さんは私の着られなくなつたワンピースをとても気に入ってくれて、それを自分が着られるようにリメイクしたいと持つて帰りました。自分が使っていたものが他の人にも大切にされているのを見るととてもうれしい気持ちになります。

このように、私の毎回楽しみにしているフリーマーケットは良い点がたくさんあります。

ふつうのフリーマーケットはもちろん、このようなフリーマーケットが学校や子ども会などで行われるようになると、みんなが物を大切に使うようになるので、資源のむだが減ると思います。

環境大臣賞

中学生部門

福岡県 大野城市立大利中学校二年生

『命をつなぐ環境』

池田 茉奈美

「くるん」そう聞こえた気がした。キャベツの葉を一枚ずつ洗つて四枚目。私の目は、大きく見開いた。「動いている」見つめると人の皮ふの色にも近いその姿は、小指の第一関節ほどだ。私は急いで水道を止めた。生命が水をはじいた。「生きている」ゆつたりと進み出した。私はその虫をキャベツにのせたまま、両手でかかえた。家の庭の土を掘り、その中へ、そっと入れた。

しばらくして、その場所を掘り起こした。キャベツは、しなやかで、あの虫の姿はなかつた。手でかき分けてみる。半分、土に変わつて落ち葉。土の中に、ひそんでいた虫たちが動き出す。あの虫を探した。似ている虫が近づく。「土に守られていたんだ」じわーっとあたたかくなつた。よく見ると、フンのような粒がある土は、ふんわりとしてぎつしり根が細かい。虫はその根も食べていた。虫も植物も、衰えたり枯れたりしても、姿を変え、他の生物の力となる。命が集まる土。出会う命を支え合う。再び生き続ける。まるで「命が集まる輪」のようだ。私は土で育つ作物を毎日食べている。私も土と関わりその輪につながっている。そう思うと、心がやわらかくなつた。

「ありがとう」土にふれた。土からできる食べ物。それを食べる。その後私も、何をすれば「命が集まる輪」を続けられるだろう。再びすること。「生ごみのリサイクル」を思ついた。あの土の中で見た落ち葉を手がかりに考えた。お茶がらと飲んだ後のティー・パック

を土の中に入れた。

二週間ぐらいたつて、土のようすを見た。色が変わつて、土にとけこみ、形もほとんど消えていた。水気をよくきつたお茶がらのまわりの土の方が、においがなかつた。土が、さらつとして、ふくらんでいた。太陽があたると、土のぬくもりが広がつた。虫も光をめざし勢いづく。ただ、ティー・パックだけは残つて、土から生み出されていないものは、土と一体にならないと実感した。私は深呼吸した。はつとした。土も呼吸しやすく、あの輪がくり返し回る方法を考えた。水気をきる、太陽の光をあてる。この二つのことは、生ごみを乾燥させることに結びつく。そうすれば、生ごみの量も減り、土に還るのに負担がかかりにくい。生ごみのリサイクルには、ふさわしいものとそうでないものがある。だから、ゴミを分けるのだ。これが「分別」なのだと、実際に、やってみて分かつた。

生ごみのリサイクルを試みた土は、玄関近くの花壇の土に入れられた。「命が集まる輪」は土から、花となつて咲いた。あのとき、キャベツから「くるん」と聞こえたのは、この輪がふれ合つたからだ。命を育てる土と、生ごみのリサイクルを身近に感じるきっかけとなつた。私が暮らす環境に、この輪はいつもある。これからも。生ごみのリサイクルを実行し、この輪に寄り添い、繋げていきたい。

地球ニどもクラブ賞

香川大学教育学部附属高松中学校三年生

『過去からの風は未来へと…』

杉村 真子

五月晴れの爽やかなある日、部屋にかけられた一枚の振袖が目にとまつた。

幾枚かの着物の中でも際目を引いたそれは、姉が袖を通した物であり、母の成人式を彩った物でもあつた。そして、遙か昔に祖母が身にまとつたであろう着物であつた。

その振袖が幾歳月を経て今、私の目の前にある。

「お古」とか「お下がり」という言葉で称される日本に昔からあるこの行為こそ、リサイクル・リユースの原点だと思う。

町には古着屋とかリサイクルショップとかが花盛りであり、人々はオシャレのひとつとして3Rを楽しんでいる様子がある。

海の向こうからやって来たガレッジセールやフリーマーケットは日本に定着した。『MOTTAINAI(もったいない)』が世界の言葉になった。使い捨てから3Rの時代へ…。

日本人が古くから伝えてきた「お古」や「お下がり」の風習を伝え続けていくことが、私たちだれもができる3Rの一歩だ。

和服を日常着としなくなつて久しいが、町で着物のリサイクルショップを目にすることがある。和服を洋服や小物にリメイクしたものを扱う店もある。かつてタンスの肥やしと言われ、眠つたままになつていた和服が新しくなつて蘇る。

我が家にもタンスの肥やしがたくさんあるが、リメイクされた

ものもいくつもあり、日常に使用しているものもある。かつて曾祖母の着物だったものが母の手さげ袋となつて活用され、今では味わい深いものになつていて。

ゆかただつたものを曾祖母が布おむつに縫いかえていた。自分が寝つきりになつた時に使ってほしいと言つていたそうだ。姿を変えたゆかたの出番はなかつたが、それはそれで良かつたと思う。

祖母から母へ、母から私へ、そして次の世代へと受け継がれるのは物だけではなく、物を大切にする心だと強く感じている。使えなくなつた物を形を変えて次に活かす。自分が必要でなくなった物は必要とする人の手へ。

そうやって日本人は何でも大切にしてきた。今こそ、そのDNAを生かし、3Rに取り組む時だと思う。古くいにしえの時代から変わらない日本人の心の有り様は私たちの自慢すべき宝だ。

いつの日いか、私も袖を通すであろうお下がりの振袖が風に揺れでいる。先人たちの思いが風を吹かせたのかなと思った。

審査委員長賞

沖縄県 普天間第二小学校四年生

『私のEM』

新城 瑞妃

3Rとは、ゴミをへらす・くり返し使う・再び資源として利用しようということです。

私はEMという発酵液をつかって野菜をつくったり、海や川をきれいにしたりしています。

このEMには、乳酸菌・酵母菌・光合成細菌の3つがなかでも大切なやくわりをはたしています。

乳酸菌は有機物を発酵させたり悪玉菌の活動を抑えます。酵母菌も有機物を発酵させる力が強く、またその菌そのものが栄養分のかたまりで作物にいい影響を与えます。光合成細菌はEMの中心となる微生物で汚染を無害化する働きがあります。

これらの微生物がばらんすよく働くと、他の有用微生物も活性化し、これまでに説明したような効果があらわれてくるのです。

それで、どうすると海や川がきれいになるかといふと、このEMをはいすいこうに流すと、はいすいこうも微生物のおかげでよく流れようになるし、海のよこれも微生物がきれいにしてくれるので、石二鳥です。

私はそのEMをつかって、生ゴミを土にかえし、野菜にとっていい土をつくつてみました。くさかった生ゴミがこんなに変身するとも思つてもいませんでした。

それに、EMでつくったトマトとえんげいトマトをくらべると、EMの方が口の中でぶちつとはじけてほんのり味がひろがりました。EMトマトは、はじけるところがおいしくてたまりませんでした。

EMのいい所、それはよい微生物をさきにふやせる所です。

なぜかといふと、微生物はありとあらゆる場所にいて、増えるチャンスをねらっています。しかし、悪い微生物の方が仲間を増やすと、微生物は空気にのつてやってきますから、いくら殺菌してもきりがないからです。

これらのことから、私はEMをおすすめします。

かんきょうにもやさしいし、米のどぎ汁をゆうこうなものにかえられるからです。

このEMのすばらしさを学級新聞でひろめていて、みんながじつこうすると川や海はきれいになつて、かんきょう問題のつはクリアできると思うし、清流にしかすめないイワナやアメンボなどもいつでもみられるようになると思います。

なので、家庭でも作れる、微生物が増やせる、せんざいをつかう量がへることから、私はもっとEMをしらない人たちへひろげていって世界じゅうの海や川をきれいにしたいです。なぜなら、生き物すべて地球ですから、人間が暮らしをゆたかにしていくほど他の生き物たちが苦しんでいきます。そうならないために、いま、できることをさがしてはじめていきます。